往復連載

ドーバー越えて

齋藤敦子
中野香織

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

カット・井上陽子

中野香織

⑭割れあご男と海パン一丁男

あのグレタ・ガルボがムルナウのデスマスクを所有していたとは！　お見立てのとおり、サロメの世界を彷彿とさせますね。で、すっかりその気になって、ガルボ＝サロメがいとおしげに抱いている顔の表情を想像しようとしたのですが、う～ん、つい思い浮かんでしまうのが、マルコヴィッチなんですよ。「シャドウ・オブ・ヴァンパイア」でのムルナウ役の怪演、強烈でしたから。サロメが抱いてる顔が寄り目で禿げてちゃ、まずいですね。

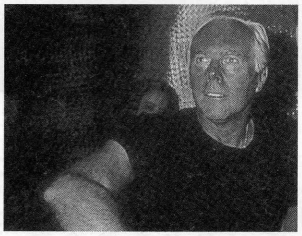
そういえばムルナウってどんなお顔だったのだろうか、とキネマ旬報の「外国映画監督スタッフ全集」に載ってる写真を見たら、これがまあ、鼻筋が通って割れあご風の、知性みなぎるいい男。しかもゲイ特有のしゃれっ気もある。こんなデスマスクならわたしもほしい（うそ）。

それにしても、この機にはじめてムルナウのミニ伝記も読んだんですけど、この人、作った映画も流麗でスタイリッシュなら、本人も映画のような（敦子さんの言葉を借りればゴシック・ロマンな）人生を送ってるんですね。この人にしてこの作品あり。学生時代に映画の授業でかの蓮實重彦先生に何度も見せられた「サンライズ」も、ほとんどのシーンを暗記してるつもりでしたが、ムルナウがゲイだったと知った今あらためて見直せば、主演のジョージ・オブライエンのノスフェラトゥ的しぐさも見え方が違ってきたりして。

ともあれ、影響力の強い作品を生む作家は、存在そのものがドラマティックである場合が少なくないですね。

ファッション・デザイナーも例外じゃなくて、たとえば20世紀の三大デザイナー、シャネル、サンローラン、アルマーニにしても、作品以上にデザイナー本人が人目をひきつけて離さない力をもっている。

ドキュメンタリー映画「アルマーニ」でも、アルマーニ爺65歳、「主演男優」としてカリスマ的な存在感のあるところを示し、ちゃんと映画をひっぱってました。アルマーニのスーツって、ギアの「アメリカン・ジゴロ」服やサッカーのイタリア代表選手の移動用制服、映画関係者のパーティ服が広告効果を発揮して、すっかりセレブ・フェロモン濃度の高い服として有名になってますが、それもこれも、神経質なまでにストイックで完璧主義のデザイナーが果たした、俳優顔負けの「アルマーニとしての役割」あったればこそ、と納得させられた次第。青い海パン一丁で孤独に海を眺めるアルマーニの石膏像、あったらほしいかも。



「アルマーニ」　4月25日よりヴァージン・シネマズ六本木ヒルズにて